

P-2 ペルシア語の書き言葉における非人称可能文—tavānestan と šodan の異同—

五十嵐小優粒 (国際医療福祉大学)

susanak@iuhw.ac.jp

要旨

本発表では、ペルシア語の書き言葉における非人称構文としての可能文を考察対象とする。ペルシア語で可能を表わすマーカーは *tavānestan* と *šodan* に大別される¹。この2つのマーカーから成る可能文の中で、非人称構文に着目し、未だ先行研究でも記述されていない、動作主との共起制限や意味の異なり方を提示する。非人称ではない可能文では、*tavānestan* が「能力可能」と「状況可能」の両方を表わし、*šodan* は「状況可能」のみを表わすが、非人称の可能文においては、*tavānestan* が「状況可能」の、特に禁止の意味を帯びた文では使用不可能であることが今回の調査で新たに判明した。また、*tavānestan* は動作主の明示がなければ、ある物事が「一般的に実現可能／不可能」であることを表わし、*šodan* は、特定の人物の能力に言及せず、ある物事の生起の可能性のみを表わすことが分かった。

1. 問題の所在

ペルシア語の可能マーカーである *tavānestan* と *šodan* は、それぞれ非人称構文となり、「この水は（誰にでも）飲める」といった意味をも表わす。特に、*šodan* を用いた可能文は構文的特徴から2種類に分けられるが、*tavānestan* 構文を含めて、「非人称」であるということ以外の意味的な差異が明らかにされていない。そこで本発表では、これら3種類の非人称可能文の意味的特徴を提示する。

2. ペルシア語の可能文

ペルシア語文法においては、*tavānestan* と *šodan* の意味的な差異にまで言及した先行研究が見られないため、五十嵐（2019）では、日本語の可能文についての先行研究から「能力可能」と「状況可能」という術語を援用している。この捉え方がペルシア語の可能文にも適用することを踏まえつつ、ペルシア語の可能文を順に挙げていく。

2. 1. *tavānestan* を用いた可能文

まず、「～できる」の意味を持つ補助動詞 *tavānestan* を用いた可能文の例を挙げる。

(1a) *čon ū tajrobe dārad,*

CONJ-なぜなら PRN-彼 NOUN-経験 Vt 3SG PRES-持つ

*mī-tavānad dar yek māh īn kār rā be-konad.*²

AUX-3 SG PRES-できる PREP-で NUM-1 NOUN-月 DEM-この NOUN-仕事 PREP-を Vt-3 SG SBJV-する

（彼は経験があるので一か月でこの仕事をする事ができる。）

¹ ペルシア語には「可能」の意味を表す表現として、‘balad’ (Adj. 「知っている」) や ‘dānestan’ (V. 「知る」) も使用されるが、本発表では扱わないこととする。

² 本稿で挙げる例文について、特に出典を明記していないものは作例である。

tavānestan は人称変化を伴って現れる。本動詞もまた人称変化しており、tavānestan の人称と一致している。(1a) は、意味としては文中の動作主が一定期間内にある仕事をこなせる能力を有することを表しており、tavānestan が能力可能を表すことが確認できる。そして、この tavānestan は、次のように状況可能をも表わす。

(1b) agar hamkār -aš be ū komak konad,

ADV-もし NOUN-同僚 SUFF-PRN-3SG PREP-に PRN-彼 NOUN-助け Vt-3 SG SBJV-する

mī-tavānad dar yek māh īn kār rā anjām dahad.

AUX-3 SG PRES-できる PREP-で NUM-1NOUN-月 DEM-この NOUN-仕事 POSTP-を CV-3 SG SBJV-する

(もし同僚が手伝えば、彼は一か月でこの仕事をする事ができる。)

この tavānestan の不定法幹を用いた非人称構文としての可能文 (tavānestan の不定法幹+動詞の過去語幹³) が次の (2) である。

(2) mī-tavān īn āb rā xord.

AUX-IMP-できる DEM-この NOUN-水 PREP-を Vt-3 SG PAST-飲む

(この水は (誰にでも) 飲める。)

これは、その水の特徴を表象する「属性叙述文」とも言える。もう一つの可能マーカーである šodan も本動詞を過去語幹にすることで、tavānestan の非人称構文と同様に「属性可能」を表わす。次節では、šodan から成る可能文を 2 種類挙げる。

2. 2. šodan を用いた可能文

šodan は「～の状態になる」という意味の自動詞であり、単独でも本動詞として用いられるが、補助動詞としても複合動詞を形成する。可能文もまた、šodan を用いた複合動詞の 1 つである。

šodan を用いた可能文は統語的・意味的に大きく二種類に分かれる。

2. 2. 1. šodan が本動詞の前に来る構文

šodan を用いた可能文には 2 種類の構文があり、ここではまず šodan が本動詞の前に来る構文を挙げる。

(3a) čon īn qazā xeylī ziyād ast,

CONJ-なぜなら DEM-この NOUN-料理 ADV-とても ADJ-多い Vi 3SG PRES-です

nemī-šavad hame -ye ān rā be tanhā'ī boxorī.

Vi-3 SG PRES NEG-なる NOUN-全部 PREP-の A-PRO-その POSTP-を ADV-一人で Vt-2 SG SBJV-食べる

(この料理はとても多いから、君一人では食べられない)

³ ペルシア語において、過去語幹と三人称単数過去形は同一の形態である。

動作主に合わせて人称変化し、動作主体を明示する *tavānestan* とは異なり、可能文として使用される *šodan* は、原義のとおり「ある状態になる」という意味を有し、実現可能または不可能な現象についてのみ言及する。

(3a) のように人称表示をすることも可能である。一般的・常識的な基準として状況的に可能か不可能かを判断する場合に非人称の *šodan* 構文が用いられ、「ある人物がある事を成すという現象が起こり得るか否か」ということを表わすには、上の (3a) のように本動詞の語尾を人称変化させるか、動作主を文中に明示するなどして示す。

一方、下の (3b) は、動作主体には関与せず、人称語尾は常に三人称単数形⁴で現れ変化しない。時制の変化と肯定・否定のみを語形変化で示す。本動詞は過去語幹になっており、非人称であることを表わす。つまり「料理の分量から判断して、誰にとっても完食が困難」であることを表わしており、特定の誰かの能力を言及しているのではない。

(3b) *čon in qazā xeylī ziyād ast,*
 CONJ-なぜなら DEM-この NOUN-料理 ADV-とても ADJ-多い Vi 3SG PRES-です

nemī-šavad hame -ye ān rā xord.

Vi-3 SG PRES NEG-なる NOUN-全部 PREP-の A-PRO-その POSTP-を Vt-PAST-STEM-食べる

(この料理はとても多いから、全部は食べられない)

(3b) の文意として、「料理を食べる能力がない」とは解釈しにくく、その多さという外的要因に行為の実現が左右されていることから、*šodan* が状況可能を表していることが分かる。

2. 2. 2. *šodan* が本動詞の後に来る構文

次は *šodan* が本動詞の後に来る形式の可能文である。

(3c) *čon in qazā xeylī ziyād ast,*
 CONJ-なぜなら DEM-この NOUN-料理 ADV-とても ADJ-多い Vi 3SG PRES-です

hame -ye ān xorde nemī-šavad.

NOUN-全部 PREP-の A-PRO-その Vt-PASTP-食べる Vi-3 SG PRES NEG-なる

(この料理はとても多いから、全部は食べられない)

まず、(3c) でも *šodan* が三人称になっているが、(3b) の *šodan* と同様に特定の人物を指すのではなく、「提供された料理の量が多過ぎる」という状況からして、完食されるという事態にはならないだろうということを表わしている。ペルシア語を公用語とするイランでは、客人を招く際に多分に余ることを想定して料理を用意する。それを容易に平らげることは、(その社会で) 一般的・常識的に考えて不可能、または可能と判断される状況である。

本発表では、これらのペルシア語の可能文のうち、*tavānestan* を用いた (2) および、*šodan* を用いた (3b) と (3c) の意味上の差異を明確にし、提示することを目的としている。

⁴ 動詞の活用が三人称単数形と同形になるだけであり、意味としてはあくまで非人称を表わす。

3. 調査方法

ペルシア語における非人称可能文の意味上の相違点とその出現様相を探るため、各可能文の *tavānestan* と *šodan* の置き換えが可能か否かを調べた。具体的には、*tavānestan* 構文はそれを *šodan* に、*šodan* 構文はそれを *tavānestan* に置き換えた構文をペルシア語ネイティブに提示し、文法的に正用になるか否かを判定してもらった。その結果より、各構文の異同を分析した。

本研究では、データとして「世界人権宣言」の他、日本とイラン間で交わされた条約文⁵と小説文（使用した作品は、‘*qessehā-ye xūb barāye baččehā-ye xūb*’（『よい子のためのよいお話』（以下、「よい子」））と、日本の文学作品のペルシア語翻訳版⁶）を使用して、可能文を 261 例抽出した。このうち 30 例あった非人称構文を調査対象とした。

4. 調査結果と考察

4. 1. 2 種の *šodan* 構文の差異

まず、2 節の (3b) と (3c) の相違点について整理する。

両者とも、料理の多さという特徴を語るための「属性叙述文」とも考えられるが、これらの統語的特徴以外の違いは、(3a) が主観的判断で、かつ状況の設定次第で実現可能になる変動的な状況を表わす。例えば、パーティーの招待客の中に大食いの人物が含まれていれば食べ切ることができる、というような可能性が残されている場合である。それに対して (3c) は完全な客観的判断である。特に法などで定められているために個人的な範囲で実現の可能性を探りにくい状況に用いられる。

このことを裏付けるため、他の例も挙げる。下の (4a) のように、一般的・常識的な判断がなされる場合、この「動詞の過去分詞形+*šodan*」が用いられる。(4b) の文では、例えば「カビの生えているところを切り取れば食べられる」など、個人的な判断が介入できる余地を残している。

(4a) *čon in sīb kapak zade ast, xorde nemī-šavad.*

CONJ-なぜなら DEM-この NOUN-りんご CV PRES-PF-カビが生える Vi-PASTP-食べる Vi-3 SG PRES NEG-なる

(このりんごはカビが生えているので食べられない)

(4b) *čon in sīb kapak zade ast, nemī-šavad xord.*

CONJ-なぜなら DEM-この NOUN-りんご CV PRES-PF-カビが生える Vi-3 SG PRES NEG-なる Vi-PAST-STEM-食べる

(このりんごはカビが生えているので食べられない)

また、(3b) と (3c) の構文で、片方が不自然になるケースを挙げる。

(5a) *mī-šavad dar īnjā maqna'e -at rā bardārad.*

Vi-3 SG PRES-なる PREP-で PRON-ここ NOUN-マグナエ SUF-PRN-2SG POSTP-を Vi-3SG SBJV-とる

(ここではマグナエ⁷をとることができますよ)

⁵ 「刑を言い渡された者の移送に関する日本国とイラン・イスラム共和国との間の条約」と「投資の相互促進及び相互保護に関する日本国とイラン・イスラム共和国との間の協定」の 2 つを使用した。

⁶ 安部公房の「犬」、「使者」、「無関係な死」、「夢の兵士」、そして村上春樹の「土の中の彼女の小さい犬」、「どこであれそれが見つかりそうな場所」、「ニューヨーク炭鉱の悲劇」を使用した。

⁷ これはイスラム教文化圏でムスリムの女性が着用する、ヘジャブという頭髪を覆い隠すためのスカーフのような布の一種。マグナエは、イスラム圏の中でもイランで使用されており、頭・首・肩を覆うものである。

(5b) ?dar ĩnjā maqna'e -at bardāšte mī-šavad
 PREP-で PRON-ここ NOUN-マグナエ SUF-PRN-2SG Vt-PASTP-とる Vi-3 SG PRES-なる
 (ここではマグナエをとることができますよ)

(5a) は (3b) と同一の構造になっており、ムスリム（イスラム教の信者）の女性は、通常屋外や公の場所ではヘジャブ⁸の着用が義務付けられているが、女性しかいないような場所ではその適用外となることが多く、ある条件下で免除されるという「状況可能」を表している。

一方で (5b) はペルシア語のネイティブには不自然と判断される。構造としては (3c) と同一のものだが、前述のとおり、これは個人の能力如何によらず、法などの客観的基準による判断がなされる場合に用いられる。ところが (5b) は、個人による倫理観の違いなど、主観的な判断も多分に含まれるため、このように個人の判断に委ねられる要素がある場合は (5a) の構文で表わす方が自然だと考えられる。

4. 2. tavānestan と šodan の非人称構文の差異

次に tavānestan と šodan が置き換え不可能であったケースを挙げる。

(6a) yārī ke be došvārī be dast āyad be āsānī az dast
 NOUN-助け REL ADV-辛うじて CV 3SG PAST-入手する ADV-簡単に PREP-〜から NOUN-手
na-tavān dād. (「よい子」)
 AUX-NEG IMP-できる Vt-PAST-STEM-与える

(やっと助けてもらえるところをやすやすと見逃す手はない)

(6b) *yārī ke be došvārī be dast āyad be āsānī az dast
 NOUN-助け REL ADV-辛うじて CV 3SG PAST-入手する ADV-簡単に PREP-〜から NOUN-手
mī-šavad dād. (「よい子」より一部改変)
 Vi-3 SG PRES-なる Vt-PAST-STEM-与える

(やっと助けてもらえるところをやすやすと見逃す手はない)

(6b) は特定の救助者の存在が表れているため非文となる。このような場合を除いて、tavānestan と šodan の非人称構文においては、両マーカの置き換えは可能であった。このことから次の結論が導かれる。

1. tavānestan の非人称構文は šodan の非人称構文に置き換え可能。ただし、「皆」や「誰か」のような不特定の動作主を明示する表現を伴う場合は置き換え不可。
2. šodan の非人称構文は tavānestan の非人称構文に置き換え可能。ただし、「可能」(〜することができる) という意味での使用でなければ置き換え不可。

上記 2 の例証として、(7a) と (7b) を挙げる。

(7a) bolbol haq dārad gol rā dūst be-dārad

⁸ イスラム教文化圏でムスリムの女性が着用する、頭髪を覆い隠すためのスカーフのような布。

NOUN-小夜鳴き鳥 NOUN-権利 Vt 3SG PRES-持つ NOUN-花 POSTP-を CV SBJV 3SG-好む

ammā gol barāye tamāšā kardan va būīdan ast

CONJ-しかし NOUN-花 PREP-~のため CV INF-見る CONJ-そして Vt INF-嗅ぐ Vi 3SG PRES-です

na barāye parpar kardan va parīšān kardan, īn ke nemī-šavad... (「よい子」)

INT-いいえ PREP-~のため CV INF-散らす CONJ-そして CV INF-撒く PRON-これ REL Vi-3 SG PRES NEG-なる

(小夜鳴き鳥がバラを好きになるのは勝手だけれど、バラは眺めたり香ったりするもので、バラバラに散らしたりするものじゃない。それはダメだよ。)

(7b) *bolbol haq dārad gol rā dūst be-dārad

NOUN-小夜鳴き鳥 NOUN-権利 Vt 3SG PRES-持つ NOUN-花 POSTP-を CV SBJV 3SG-好む

ammā gol barāye tamāšā kardan va būīdan ast

CONJ-しかし NOUN-花 PREP-~のため CV INF-見る CONJ-そして Vt INF-嗅ぐ Vi 3SG PRES-です

na barāye parpar kardan va parīšān kardan, īn ke nemī-tavān... (「よい子」より一部改変)

INT-いいえ PREP-~のため CV INF-散らす CONJ-そして CV INF-撒く PRON-これ REL AUX-IMP NEG-できる

(小夜鳴き鳥がバラを好きになるのは勝手だけれど、バラは眺めたり香ったりするもので、バラバラに散らしたりするものじゃない。それはダメだよ。)

(7a) と (7b) は、物事の実現に言及する「可能」の意味ではなく、あることが許容されるか否かを問うものである。このような文意の場合、šodan を用いるのが適切で、tavānestan は使用できない。

非人称ではない可能文においても、šodan が特定の人物の能力を表わさないのに対し、tavānestan は、状況可能のみならず、能力可能をも表わす。その特徴が非人称構文になると、不特定でありながら人的な働きかけによる可能性を表わすことに特化し「一般的な可能性」については šodan に一任される。

5. 結論と今後の課題

以上の調査結果より、次のことが言える。

1. tavānestan の非人称構文は、「皆」や「誰か」などの不特定の動作主の存在を明示する表現を伴うことで、「能力可能」の意味を表わし、動作主の明示がなければ「一般的に実現可能」であることを表わす。
2. šodan の非人称構文は、決して動作主を表わす表現と共起しない。それは、šodan の可能文が「能力可能」の意味を担わず、「状況可能」に特化して使用されることを意味する。

ただ、本発表のために行なった今回の調査は、非常に限定的な資料に基づいたものであり、ケーススタディの域を出ない。今後さらに多様な書き言葉よりサンプル数を増やして今回得られた結果の精緻化を進めていく所存である。

引用資料

مهدی آنر یزدی،^۹ (۱۳۵۱/۱۹۷۲) قصه های خوب برای بچه های خوب، جلد اول چاپ نهم، انتشارات امیر کبیر.

^۹ イランで発行された参考文献の発行年については、左側にヒジュラ暦を、右側に西暦を付した。

(Āzar-yazdī, Mehdī. (1351/1972) *qesse-hāye xūb barāye bačče-hāye xūb* (『よい子のためのよいお話』)
Tehran: našre češmeh.)

کوبو آبه، (۱۳۸۴/۲۰۰۵) تجاوز قانونی، ترجمه علی قادری، تهران: انتشارات مروارید.

(Kobo, Abe. (1384/2005) *tajāvōz-e qānūnī* (『法の侵入』) Tehran: entešārāt morvārīd.)

هاروکی موراکامی، (۱۳۸۵/۲۰۰۶) کجا ممکن است پیدایش کنم، ترجمه ی بزرگمهر شرف الدین، تهران: نشر چشمه.

(Hārūkī, Mūrākāmī. (1385/2006) *kojā momken ast peydāyaš konam* (『それが見つかりそうなどこかで』)
Tehran: našre češmeh.)

参考文献

五十嵐小優粒 (2019) 「書き言葉におけるペルシア語の可能文—*tavānestan* と *šodan* の使用領域—」『言語文化学研究 (言語情報編)』第 14 号 大阪府立大学人間社会システム科学研究科 人間社会学専攻言語文化学分野 pp. 1-25

井島正博 (1991) 「可能文の多層的分析」 仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版 pp. 149-189

大崎志保 (2005) 「日本語の自動詞による可能表現—動詞制約を中心に—」『日本語文法』5-1 pp. 196-211

奥田靖雄 (1986) 「現実・可能・必然 (上)」『ことばの科学』むぎ書房 pp. 181-212

亀井孝・河野六郎・千野栄一編 (1992)『言語学大辞典』第 3 巻 三省堂

渋谷勝己 (1995) 「可能動詞とスルコトガデキル—可能の表現—」 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』くろしお出版 pp. 111-120

寺村秀夫 (1982)『日本語のシンタクスと意味』I くろしお出版

日本語記述文法研究会編 (2009)『現代日本語文法』2 くろしお出版

Homayoun, Homadoxt. (1993) *A Dictionary of Linguistics and Related Sciences*, Tehran: Institute for Cultural Studies and Research.

احمدی گیوی، حسن. (۱۳۸۴/ ۲۰۰۶) دستور زبان فارسی فعل، تهران: نشر قطره.

(Ahmadī-Gīvī, Hasan. (1384/2006) *dastūr-e zabān-e fārsī Fe'l* (『ペルシア語文法・動詞』Tehran: našr-e qatre.)

طیب زاده، امید. (۱۳۸۵/ ۲۰۰۷) ظرفیت فعل و ساختهای بنیادین جمله در فارسی امروز، تهران: نشر مرکز.

(Tabībzādeh, Omīd. (1385/2007) *zarfīyat-e fe'l va sāxthā-ye bonyādīn jomle dar fārsī emrūz* (『今日のペルシア語における動詞の結合価と文の基本構造』) Tehran: našr-e markaz.)

عبدالعظیم قریب، جلال همایی، رشید یاسمی، ملک الشعراى بهار، بدیع الزمان فروزانفر. (۱۳۷۳/۱۹۹۴) دستور زبان فارسی پنج استاد، تهران: انتشارات ناهید.

(Abdul' azīm Qarīb, Jalāl Homāī, Rašīd Yāsamī, Malek-olšo' arāye Bahār, Badī' olzamān Forūzānfar.) (1373/1994) *Dastūr-e Zabān-e Fārsī Panj Ostād* (『ペルシア語文法 (5 人の教授による)』) Tehran: Entešārāt-e Nāhīd.)

فرشیدورد، خسرو. (۱۳۸۲/۲۰۰۴) دستور مفصل امروز، تهران: انتشارات سخن.

(Faršīdvard, Xosrow. (1382/2004) *dastūr-e mofassel-e emrūz* (『現代文法詳説』) Tahrān : entešārāt-e soxan.)

فرشیدورد، خسرو. (۱۳۸۶/۲۰۰۸) فعل و گروه فعلی و تحول آن در زبان فارسی، تهران: انتشارات سروش.

(Faršīdvard, Xosrow. (1386/2008) *fe'l va gorūh-e fe'lī va tahavvol-e ān dar zabān-e fārsī* (『動詞と動詞の分類，ペルシア語における動詞の変形』) Tahrān: entešārāt-e sorūš.)